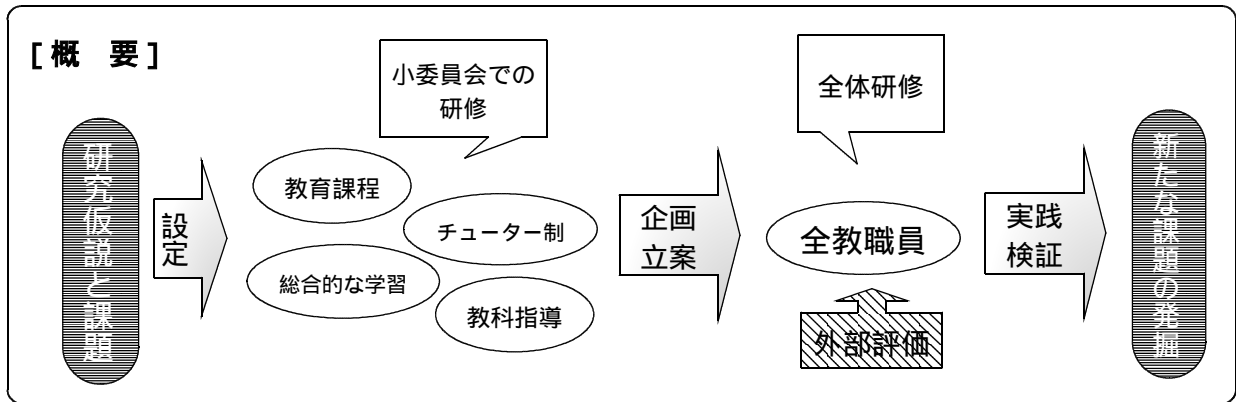


8 中高一貫教育校の特性を生かした教育課程の編成や教科等の指導の在り方についての研修を推進する



中高一貫教育校の特性を確認し、研究仮説を立て、研究課題を設定する

まず、中高一貫教育校である本校の特性を確認し、それを踏まえて、学校教育目標を達成するためのベースとなる研究仮説と研究課題を設定する。  
(例)

- 学校の特性
- ・ 6年間を見通した継続的な学習指導、進路指導、生活指導ができる。
  - ・ 成長・変化の著しい時期に幅広い年齢層の生徒たちが一緒に学校生活を送っている。
  - ・ 本州の最西端に位置し、古くから海外との交流の玄関口として重要な役割を果たしてきた。特に東アジア諸国とかかわりは深く、現在も文化的、経済的交流が盛んである。

研究仮説

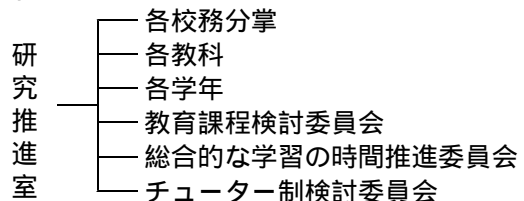
これらの中高一貫教育校の特性や地域的特性を最大限に生かした教科指導・生活指導・進路指導等を行うことによって、確かな学力と豊かな人間性を持ち、同時にコミュニケーション能力、自己表現力を身に付け、世界に飛躍する人材を育成できる。

- 研究課題
- 中高一貫教育校の特性を生かす教育方法として
- ・ 6年間を見通した教育課程及び教科指導
  - ・ チューター制 ・ リトルティーチャー制
- 地域の特性を生かす教育方法として
- ・ 総合的な学習の時間としての「海峡学」、「東アジア文化入門」
  - ・ 語学教育、コミュニケーション能力・表現力の育成

研究の核となる組織づくりを行う

次に、研究を進めていくうえで中核の組織となる「研究推進室」を設置し、その下に、各研究課題に対応する小委員会を設置して、研究の能率的、効果的な進行を図る。

(例)



各小委員会は、全教職員の共通理解の下で、それぞれの課題に対する取組の企画・立案を行い、研究仮説の検証を行う。

例 教育課程検討委員会における検討内容等

検討内容	企画・立案内容	全教職員による実践内容
前期課程（中学）の生徒が後期課程（高校）に進んだ際の教育課程について	1～4年生を「基礎・基本期」、5～6年生を「充実・発展期」と位置付け、授業時数や選択科目を設定する	各教科との連携により、シラバスを再検討し、6年間を見通した能率的かつ効果的な学習内容の配列の見直しを継続的に行う
現行の教育課程よりも単位数を増加させる教育課程の編成について	45分授業、7限授業を実施する	生徒の成績の推移を多角的に分析し、学力の向上に必要な手だてを考える
「夢サポートセミナー」（1年生を対象にした、学力の一定レベルの確保と学習方法の習得を目的とした講座）の実施時期や時間数、実施内容について	入学当初の一定期間（4～5月のゴールデンウィーク前まで）、TTなど授業形態を工夫して、授業を実施する	実施に基づいてのメリットやデメリットを検証し、より充実したセミナーとするための検討を行う

専門家を招いて、研究課題に関する全体研修を実施し、教職員全体の理解を深める

日々の実践に加え、各研究課題に関連するテーマについての全体研修を、講師を招聘して行い、教職員全体の資質の向上を図る。

例

テーマ：中高一貫教育の現状と課題  
 講師：民間の教育関連企業から招聘  
 内容：

- 中高一貫教育の現状について
- ・中学校教員と高校教員の意識の差
  - ・中学校段階での男女の特性
- 中高の接続について
- ・高校入試がない中での中高の切り替え
  - ・高校生としての学習習慣の構築
- 6年間を見通した教科指導について
- ・どの時期にどういう情報を与えるか
  - ・効果的な中間目標の設定
  - ・学力と生活習慣の相関関係
- 大学入試の動向と対策

民間の教育関連企業の専門家による、中高一貫教育の効果を上げるための方向性についての講義は、新しい発見が多いと思われる。

研究の評価を多角的・総合的に行う

研究の達成状況の把握、研究仮説の検証等を客観的に行うため、内部評価及び外部評価を行い、それらの結果を総合的に分析することにより、研究の方向性や新たな課題の発見に役立てる。

評価方法の例

- 授業評価...年2回、生徒対象  
 学校評価...年2回、生徒・保護者・教職員対象  
 その他...研究推進室、各小委員会による

現状の問題点と今後の課題を明確にし、次年度以降の新たな研究の視点とする

本稿では、中高一貫教育の特色を生かすための教育課程の編成や教科等の指導の在り方をテーマとして、小委員会における少人数討議法と全体研修における講義法によって、校内研修を推進する方法について述べてきた。しかし、今後、学年が進めば、生徒の実態も変化し、年を追うごとに生じる課題に対し、新たな研究の必要が出てくる。試行錯誤しながらも、これからの中高一貫教育校の進む道を継続的に開拓していく必要があることから、常に、新たな視点で研究に臨む意欲を喚起するための研修の工夫も必要になるとと思われる。